



インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

五 懺悔と叫び

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

五 懺悔と叫び

★

「アキホさん！」

走っていた足を僕は止めた。

数十メートル先の一軒家の前で、アキホさんが立っているのが見えたからだ。

「何をやっているんだ……？」

あの家に何が……。

「もしかして！」

あの家に、いるのか？

アオイさんが……！

「っ……考えても仕方がない」

アキホさんを目指して僕は再び駆けだした。

すると。

「……！」

何もない空中から、おぞましい雰囲気を放つ霊が姿を現した。

右手に抜き身の刀を持ったその霊は、薄汚れた布を腰に巻き、上半身は裸で、髪を逆立たせていた。

岩男さんからは、僕を襲った霊の特徴はまだ教えてもらっていないけれど、一目で分かった。

今、目の前に姿を現した「アレ」が、僕を電柱に叩きつけ岩男さんと戦った霊だ。

ヤツはアキホさんに背後から近づいているが、アキホさんは気付いていない。

そう言えば、ヤツは気配を消せるらしいと岩男さんは言っていた。

「アキホさん！」

僕の呼びかけにアキホさんは気付かないで、そのまま一軒家の中へと入っていた。

ヤツもアキホさんに続いて、家の中へと消えていった。

「くそっ！」

走りっぱなしで悲鳴を上げている足が苛立たしい。

「きゃあ！」

家の中から悲鳴が聞こえた。

「アキホさん……！」

あと少しで、家に辿り着く……！

その時。

「……っ！」

家の中に入っていったはずのヤツが突然、目の前

の道に現れた。

「あの男、昨日のクソ術使いか……」

ヤツは何やら悪態をついている。

「どうする……」

走る足を止めないで僕は考えた。

アイツには絶対に勝てない。

だけど。

だけど……！

せめて、一発殴るくらいは……！

「ああああああ！」

叫び声を上げて、坐道から貫った紙を僕はポケット

トから取り出した。

「ん？」

触れる事の出来る距離まで近づいた時になって、

やっとヤツは僕に気付いた。

だけど、もう遅い。

「くらえ！」

叫びながら、紙を握った拳をヤツの体に叩きつけ

た。

すると。

「があっ！」

声を上げてヤツは道の先まで吹き飛んだ。

☆

ボン！ と、爆ぜるような音が外から聞こえた。

「な、何？」

夏美さんが、あの禍々しい霊と戦っているのだからか？

うか？

「アキホ、アキホ！」

倒れたアキホさんを抱えて、アオイさんは呼びかけた。

「あ、アオイ……」

「あ、アオイ……やつと会えた」

弱々しく笑いながら、アキホさんは言った。

「私、ずっとアオイを探していたの……」

アキホさんの言葉に、アオイさんは泣きながら謝

った。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

「なんで……アオイが謝るの？」

アオイさんの頬に触れてアキホさんは訊ねた。

「私は……アキホが自殺して、とても傷ついた……」

だから、心のどこかであなたを拒絶していたのかもしれない……だから今まで会えなかったのかも

……」

そんなアオイさんの懺悔に対して、アキホさんは

言った。

「悪いのは私だよ……アオイは私の事をいつも励ま

してくれた……それなのに、そんなアオイの気持ち

を裏切って、自分で自分を殺したのだから……」

ほんっとうにバカだよねえ、と力なくアキホさん

